

通信



虚無僧尺八・平泉に響く(全国竹友会)―震災の翌年から秋に平泉行脚継続―

目次

- | | |
|---|--------------|
| ●表紙写真 | 1 P |
| ●小さくても光り輝く地域からの発信
いま輝く酪農家の女性たち 「くずまきジェラート クローバー畑」と「よつば会」 | 2 P～4 P |
| ●事務局だより | 4 P |
| ●2019年度 連続講座「岩手の再生」第1回講座
演題「少子高齢化・人口減少と私たちの暮らし」
講師 岩手大学名誉教授 岩手地域総合研究所理事長 井上 博夫 さん | 5 P～8 P |
| ●「地名の話 16」 | 高橋 宏寿 さん 8 P |

NPO法人
岩手地域総合研究所

岩手県盛岡市中央通二丁目8番21号 Mホール
Tel・Fax:019-624-6715
メール:i-chiikisouken@salsa.ocn.ne.jp

小さくても光り輝く地域からの発信

いま輝く酪農家の女性たち

「くずまきジェラート クローバー畑」と「よつば会」



「くずまきジェラート クローバー畑」は、葛巻町から久慈市に向かう国道281号線沿いにあります。県立葛巻高校を過ぎ、さらに、同町のホテル・グリーンテール入口を過ぎた右手にウッドデッキを備え

た明るくかわいらしい建物が見えてきます。それが、「くずまきジェラート クローバー畑」のお店です。

その建物の中に加工設備を備えています。ここで、毎週水曜日にジェラート(イタリア発祥のアイスクリーム)をつくり、木、金、土、日曜日に販売しています。車で平庭高原を超えて三陸沿岸に向かう人、

逆に盛岡へ向かう人、葛巻へ観光で訪れる人々が、ジェラートを求めて立ち寄ります。一度この店で買い求めた人がその味を知って繰り返し立ち寄っています。



左から千葉愛子さん、中村和子さん、千葉幹子さん

このたび、その店を訪問し、3人のスタッフからお話を聞き、「くずまきジェラート クローバー畑」の魅力を知りました。

搾った生乳と地元農産物で作る

この店の第一の特徴は、酪農家の女性たちが自分たちの生産する生乳と、なるべく地元産の原料(いちご・クルミ・栗等々)で、ジェラートを作り自分たちで販売していることです。

葛巻町は北緯40度線に位置しており、訪れた11月中旬、カラマツが小春日の陽光を浴び、^{だいたい}橙色に輝いていました。当町は、120年以上前に乳牛が導入され頭数、生産量とも東

北一の「酪農郷」であり、山ブドウでワインを作り、風力発電、太陽光、バイオマスで町内消費量以上の電力を生産している「ミルクとワイン、クリーンエネルギーの町」です。

町の人々が築いてきた「酪農郷」の伝統のなかで、「くずまきジェラート クローバー畑」は耕されていると言えます。それは、ジェラートを、生産者自らの生乳をベースに、町内にある牛乳工場の生クリーム、先にあげたイチゴなどのほか山ブドウ、かぼちゃ、枝豆、ヨーグルトなど数えきれないほどの地元生産物を原料として作っていることに頭れています。

そのジェラートは、自然の素材による素材で味わい深いものがあります。また、季節によって様々な味を楽しめるのです。

思いを分かり合う仲間集まる

「酪農郷」の伝統の中で生きたその味の魅力は、また、「くずまきジェラートクローバー畑」(工場と店)の成り立ちそのものの中から生まれています。

この店を運営しているのは、「くずまき乳製品加工研究会」(任意組合、会員現在7人・サポーター会員7人)です。創設・開店は2013年8月。経営体である同研究会は、酪農家の女性の自主グループ「よつば会」(中村和子会



長)が母体となつて、その有志9人によつてつくられました。

「よつば会」

は1976年暮れに発足し、今も活動を続け43年の年月を重ねています。

「くずまきジ

エラート クロ

「バー畑」の店に入ると左側の壁に掲げられている1メートル四方超の写真パネルが見られます。幼子を抱き囲んでいるお母さんたち。「よつば会」設立当初のものです。

農家を支える女性たちの苦労は並大抵ではなかったと思います。中村和子さんらが、知り合った友だち同士「思いを分かり合える仲間がほしいね」という願いでよびかけると、多くの女性たちが同じ思いをもっていて、集まり会が発足しました。

「よつば会」は農閑期の11月から4月まで月に1〜2回集まり話し合い、町内外から講師を招き酪農の勉強会、料理・洋裁講習会、日帰り研修、家族旅行、結成6周年映画自主上映などを重ねました。勉強会に夫婦で集まるな

ど夫たちも加わりました。生きた牛を扱う酪農の作業には休みがない。子供を海にも連れていけない。これではあまりにも情けないと、相談を重ね、海水浴旅行を実現しました。男たちに大いに働いてもらいました。

酪農家にとって一泊旅行は容易なことではありません。いまではあたりまえのようになっていくことですが、30余年前、一泊研修旅行を実現し、2年に1回続けてきました。最初、「一泊旅行」を提案しても「そんなこと無理よ」と決断できず、数年過ぎ、「いける人でいいから行ってみよう」ということで初陣を実現。旅館、乗り物、運転手など自分たちで手配し酪農家視察、婦人グループとの交流、観光など、もりだくさん計画し、夜は賑やかに最高に楽しんできました。

この一歩が大きな踏み台となり、泊りがけの旅行は無理という考えを少しずつ変えていきました。行けなかった仲間は「あの人が行けたのになぜ私は……」と思い、旦那さんに不満をぶつけた人もいたとのこと。こうして、自分たちの意識を変え、男たちの意識をも変えていったのです。「よつば会」は酪農家の女性たちの夢を一步一步実現し、さらには、自分たちの城「くずまきジェラート クロバー畑」をも持つことになったのです。

いま、ジェンダーギャップ(男女格差)が盛

んに言われるようになっていますが、そうした言葉が未だ目立っていない当時、女は黙って夫に付き従うものという空気が支配し、社会的には「女性の地位の向上」が課題としてあったのです。「よつば会」は農家女性の地位の向上をめざし行動し、一步一步実現してきました。

よつば会が養った力

日帰りや一泊研修で、いわゆる「6次産業化」(農産物生産、加工、販売)の事業をしているところをも研修し、みんなで「こんなことしたものだね。楽しいよね」と、夢を持ちました。それから20年余り、そんな夢もすっかり忘れていましたが、農業改良普及所の女性の普及員から「よつば会で町のブランド化事業への参入を検討しては」と勧められたのです。

その事業は、個人又はグループのおこなう起業に2千万円枠で8割を補助するもの。ほかに国の6次化産業整備事業(女性枠)で700万円の補助を受け、近代化資金860万円を借り、参加者で出した自己資金300万円、総事業費3160万円でした。

女だけで金を借りられるか、作業場・店の土地を借りることなど課題がいくつもあり、とくに女性の起業はいろんな面でハードルが高

かったのです。しかし、「よつば会」で養った活動の3要素「自立・仲間相互の信頼・夢を持つこと」がバネになり、夢の実現に向かつて結束したのです。事業化に集まったのは9人。道のり約30キロある塚森高原から通っている方は、北上山系開発の入植事業で苦勞し、その経験を生かしています。

葛巻町は高原牧場、ワイナリー、風力発電などで6次産業化の諸事業を前進させていました。標高千メートルの山地の幾つもの谷あい

夢の実現を求め続ける

近代化資金の負債もあと3年ほどで償還を完了します。続けてきた研修旅行は、海外に及び、スイス、ニュージーランドと、直近ではジエラート発祥の地、イタリアに行ってきました。

中村和子さんは、次のように言っています。「町は必要な支援はするが、口も手も足も出しません。苦勞はしましたが確実に自分達は

成長できたと思います。事業を続けていることが素晴らしいことなのです。酪農家の仕事は半端でない。苦勞しているので力がある。背伸びし過ぎない。自分たちが壊れないよう、自分たちが持っている力で精いっぱいやってきたのです」。

「くずまきジエラート クローバー畑」の現状と将来について、3人は、「店のオーナーだと言われてもピンとこないが、やってきたという達成感を感じている」、「小さいお店でできる味、その持ち味は失われません」と口々に言い、「80歳台までは頑張りたいね」と言います。

多くのお客さんは、そうした酪農家の女性たちの温かく力強い信念をジエラートの味の中に感じ取って、繰り返し訪れているのだと思います。訪問者が店に入ると、いつでも、自信に満ちた女性が醸し出す微笑みほほえみをもって迎え入れてくれます。

* 中村和子さん、千葉愛子さん、千葉幹子さんの3人のお話と「葛巻ジエラート クローバー畑」のホームページを参考にさせていただきました。

(地域総研会員・成沢方記)

事務局だより

●当研究所が主催する「わたし☆まちフォーラムinいわて2019」が11月2日(土)、マリオスおよびアイーナを会場に、79名の参加で開催されました。

今年のテーマは「岩手の少子高齢化・人口減少と私たちのくらし」と設定され、午前の全体集会ではメインテーマに対して当研究所理事長の井上博夫が基調報告をし、「岩手県の人口減少問題は日本の経済政策に起因するところが大きい」と解説しました。

その後、各分野の実践報告がなされました。吉野英岐さん(岩手県立大学教授)、高木隆造さん(岩手県立大学名誉教授)、鈴木露通さん(県社保協事務局長)、菅野宗二さん(紫波町の学校統合問題を考える会代表)の各パネリストが少子高齢化・人口減少問題から発生する諸課題について報告をしました。

「人口問題も全国的な課題としてとらえられた」「時間が少ない」などの感想が寄せられました。

午後は第1分科会(自治・まちづくり)、第2分科会(産業・労働)、第3分科会(くらし・保健・福祉)、第4分科会(子育て・教育)の4つの分科会でメインテーマに沿って各分野の現状と課題が報告・討議されました。73名の参加者がありました。詳しくは次回のフォーラム特集号でお知らせします。

2019年度 連続講座「岩手の再生」第1回講座

演題 「少子高齢化・人口減少と私たちの暮らし」

講師 岩手大学名誉教授

岩手地域総合研究所理事長 井上博夫さん

9月23日午後1時30分からプラザおでつて3階大会議室で連続講座「岩手の再生」第1回講座「少子高齢化・人口減少と私たちの暮らし」に23人が参加して開催されました。

(以下講演内容は事務局の責任でまとめました。)

はじめに

今年度の岩手の再生のテーマは、「少子高齢化・人口減少と私たちの暮らし」ということにさせてもらいました。二つばかり理由があつて、ひとつは少子高齢化とくらしというのが近年いろいろと問題になってきているということです。ふたつ目は、このテーマで今年度のフォーラム2019を行いたいということです。そのフォーラムのテーマと併せて学習をしていく機会を持ちたいということです。

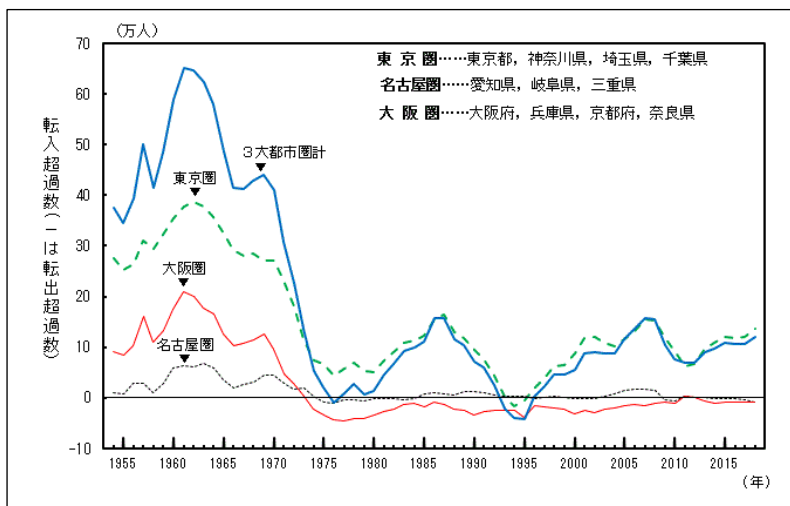
これから話をします内容は、3つのタイトルの話になっています。ひとつ目は、少子高齢化・人口減少の岩手での実態です。実際によく言われるけれども、岩手の中でどういふふう

に進んでいって、今の現状はどうかというのを客観的に捉えておこうというのが最初のテーマです。ふたつ目は、そういう現状は実際に何が問題か、私たちのくらしにどういふ影響があるのかという話です。3番目は、それに対して政府はどういう政策を提示しているのかを見ておこうという話です。

ただ、くらしへの影響と政府の政策に対して私たちがどうするかということについては、今回は5回にわたって連続講座をやることになっていますが、その中でこの問題については掘り下げていくようにしたいと思つています。

3 大都市圏の転入超過数の推移

3 大都市圏の人口の転入超過状況で、1955年という日本で高度成長が始まったときですね。そこから今日までの動きを見てみますと、今すぐく人口の集中と地方圏からの流出ということが言われますが、長期の流れ



で見ると、圧倒的にこの高度成長期のとくに民族大移動と言われるような移動が起こったわけです。その後はというと、落ち着いたり集中したりという波が何度か繰り返されて、現在は集中気味の方向に行っています。この波の形というのは、ちよつと頭の片隅に置いてもらえればと思います。

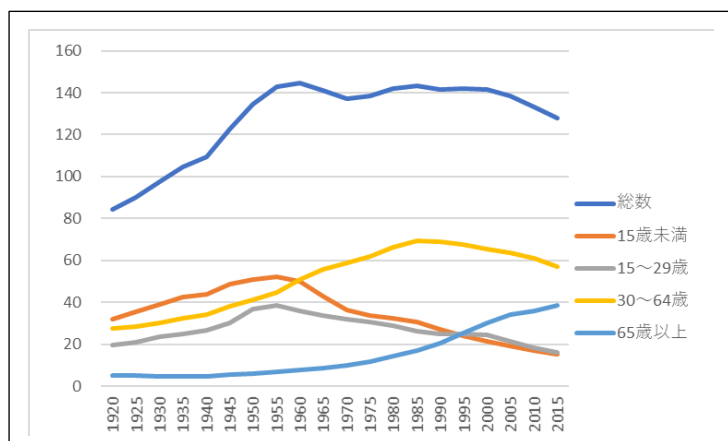
近年の特徴は何かというと、かつては、それぞれの三つの大都市圏、つまり東京圏、大阪圏、名古屋圏の3大都市圏に地方圏の人口が集ま

っていったわけです。ところが、高度成長の終了とともに大阪圏、名古屋圏への人口集中はほぼ止まっています。逆に大阪圏の場合には、減少の傾向にすらあるわけです。それで東京一極集中と言われますが、問題は東京圏だけに人が集まるようになっていくということです。ただ、規模的には高度成長期の頃に比べるとずっとなだらかではあります。

岩手県の年齢別人口の推移

高度成長期まではじわじわと人口は増えてきて、高度成長が始まるとともに人口の増加は止まってきたということです。そして、2000年代に入ってから減少してきている、大雑把にこういう傾向ですね。ただ、この辺の増減の中身を年齢別で見ると、15歳未満という層は高度成長までは増えてきて、そのあとは一貫して減少するというカーブを取っています。それから、30〜64歳という中年層は85年くらいまでは増加をしてきましたが、そこから先は減少に向かっていきます。唯一増えているのが65歳以上という高齢層です。ですから、若年層が減って高齢層が増えるのほしほし言われる話で少子高齢化ということですね。

岩手県人口の自然増減と社会増減の推移



人口の自然増は全然変わっていません。一貫して減少を続けています。東日本大震災を別にすれば、ずっと同じカーブで減少を続けていくという

ことです。これは長期的に見てそんなに変化はないです。むしろ自然増がずっと続いてきた中で社会増減はどうなっていたかということを見る必要があるんだと思います。

岩手県全体で見るとずっと社会減は続いていきます。ただ、社会減の程度を見ると相当波がある、人口流出はしているけれども、大規模な人口流出がずっと続いてきて最近もそうだとするとそれはちょっと言い過ぎで、東京圏の人口流入が多いときに岩手は減って、東京

圏の人口流入が減ったときは岩手からの流出が減る、今は若干ですが岩手から流出が増えつつあるというときです。

1980年代末辺りってどういう時代でしょう。主に経済的にですが、いわゆるバブルの時代ですね。バブルの時代というのは、東京にいろんなものが集まってきた、とくにバブルというのはお金と土地に対する投機が盛んになったところで、東京圏の地価というのが一気に上がった、岩手はそのときはそんなに変わってないのです。せいぜい仙台くらいまでがバブルがあつて、岩手まではバブルが来ていない、バブルのときに東京に富が集まっていた、それが東京圏への人口流入というのをつくっていききました。

1990年でバブルが崩壊するわけです。バブルが崩壊すると東京圏の人口流出になっている、そのあとはバブル崩壊から徐々に持ち直してきて、またここで落ちていく、これはリーマンショックですね。リーマンショックのときに、やはり東京圏は経済の落ち込みが表れて人口の流入状況に反映しているのです。要するに、人口の自然減は別ですが、人口の社会増減というのは地方から大都市圏、とくに東京圏にどれだけ富と人が集まっていくかという話なので、世界経済の影響を受けた日本経済の動向というのをすごく反映しているも

のなのです。

そうやって考えてみると、岩手の人口の社会増減というのも、岩手で頑張ろう！岩手の人を増やそう！というのも悪くはないのですが、どういう背景のもとで岩手の人口増減が起こっているかというのを考えると、世界経済とか日本経済の動きの中で決まってきたという点が非常に大きいのです。

岩手県の年齢別転入・転出率

社会増減というのと、転入と転出の差ということですね。ここからは岩手の中の話をしていきます。岩手の中で転入・転出というのを年齢階層ごとに追ってみるとどうなっているかというと、2015年の国勢調査の結果で見ると、だいたい岩手で人口が転出するのは20歳〜24歳が流出のピークです。人生の選択の中でいうと、このときは高校を卒業して大学に進学する、初めての就職をするという時期です。

岩手県内市町村の人口の推移

県内市町村でもこの間合併があったので、合併前の旧市町村単位で、国勢調査が行われた5年間ごとに追ってみると2000年〜2015年までの間に人口が20%以上減少したところは、宮古では田老、新里、川井村。大船

渡市では三陸町。花巻だったら大迫。久慈だったら山形村。一関だったら大東、藤沢、川崎。二戸だったら浄法寺というように、被合併自治体が人口減少率の最も大きいところとなっています。ただ、この被合併自治体というのは、

もともと人口減少率が大きかったところだから合併による影響というふうに即断はできませんが、現在では自らの自治体も持たないというところで人口減少率が高くなっているということことです。

少子高齢化・人口減少の各分野への影響

次は、私たちのくらしへの影響という話になります。2040構想研究会が第一次報告、第二次報告というのを出版して、そのうちの第一次報告というのは、少子高齢化と人口減少が国民生活の各分野にどういう影響を与えていくのかというのをまとめてみました。これを参照しておこうというふうに思った次第です。いくつかの分野にわたって課題を述べています。ひとつは子育て・教育です。

子育てに関しては年少人口が減ってくるにしたがって子育て環境の整備が必要だ、幼稚園のニーズが減ってきて保育所が若干増えるだろうという予測、小学校の児童生徒数も減少していくので廃校が増加していく、大学に関してでは地方私立の経営が一層厳しくなる

というような話で、そのために地方圏での大学への進学機会というのが失われる恐れがあるという話をしています。

これは連続講座の第5回目で「子ども・地域の未来と学校再編」ということで講演をお願いすることになっています。岩手では高校再編の第二段階とされています。第一段階で統合によって8校が減少したのかな。現在その次の段階の統合計画が進められつつある、その高校再編というのがどうなっているのか、地域社会にとってもどういう影響を持つのかという話です。それから小学校、中学校という義務教育でも、とくに沿岸を中心にして震災のときに大きく減少した、それが全体的にも進む可能性はある、その辺について検討したいというふうに思っています。

それから、個別分野の課題の②として医療、介護が挙げられています。とくに東京圏のことが心配されているようですが、地方圏では東京圏よりも先んじて既に高齢化が進んでいます。これに対しても講座の第4回目で社会福祉の話としてお話をしていくことにしています。

課題の③としてインフラ、公共交通の話をしています。公共交通については、既に昨年度の連続講座で取り上げました。とくに移動の自由というのが奪われる恐れがある。インフ

ラに関しては人口減少とともに、いろんな公共施設や公営企業、水道・下水、病院というのが影響を受けるという話です。この辺については第2回の「人口減少のまちづくり」ということでお話をお願いすることになっています。

④として空間管理、防災の話です。

⑤として労働力の話も出てきます。これは労働力をどうやって増やすかという話で、女性と若者もつと働けと言っているわけですが、それも講座の中で出てきます。

最後⑥として産業、テクノロジーのゆくえという話です。

少子高齢化・人口減少への政府の政策

いろいろ政府の中でも少子高齢化、人口減少に対して我々と別の意味かもしれませんが一定の危機感を持っている、その危機感に対してどういうふうにしようかというのを、そんなに統一的ではないかもしれませんが、いろんなプランが出されています。省庁別というと、最初に総務省が挙がっていて、ここで自治体戦略2040構想研究会の報告というのを挙げました。さつき紹介したのは、こういう課題があるということで、そのあと第二次報告というところでどういう自治体戦略が必要かということを書いていたのをまとめてみたものです。ここでは4点挙げています。

1番目は、スマート自治体への転換です。これは、半分の職員でも機能が発揮される自治体ということです。要するに、自治体職員数を半分に減らしてもやっていけるような自治体づくりをしましょうという話です。

2番目は、公私によるくらしの維持です。

これは一言でいうと、自治体の役割をプラットフォーム・ビルダーに変えようということです。要するにプラットフォームだけ自治体がつくる、実際に自治体職員はそこで教育や福祉や交通などの仕事をするわけではなくて、いろんな人がそこでサービス提供したり、それをつないだりする役割を自治体がつつという話です。

あとは第2回、第5回までの講座にご出席していただいて議論できればというふうに思っています。どうもありがとうございます。

地名の話 16

高橋宏壽さん

こめいちだ【米一田】東長岡字米一田

米一田は手ごわい地名である。解釈の手がかりがつかめないまま数年が経過した。県立図書館でふと手にした建設省岩手工務事務所編『北上川6』の「旧河道変遷図」に、米一田のところは八木一田とあり「地名は南部領古絵図」によるという注釈があった。八木は米の



ことなのだ。つづいての『雑書5』貞享二年(1685)三月一六日の日誌の一節の、帰国途中の松前侯への贈り物の内容です。

鮭披き五枚、雁五羽、五拾盃樽一荷、八木米廿俵、大豆五俵、糠草ヌカクサ(馬の飼料)等、右之通知例志摩守様へ被進之

八木のそばに米が挿入されていました。その後の決定打は、織田信長が永禄一二年(1569)三月、奈良の町へ出した制札の第一条です。

八木(米)を以ての売買停止テウジという望外の発見です。中世の公用語に米を八木とするしている。そうであれば、米一田は八木一田です。ヤキは「八木・谷起」とも書き、「川が増水すると冠水する氾濫原、あるいは低湿地」のことです。実際に米一田付近は、北上川が増水するたびに氾濫・冠水する場所であった。

※(↓)は旧北上川の河川敷

筆者略歴 昭和35年岩手大学学芸学部卒 安代町・盛岡市・花巻市の小学校に勤務、平成9年退職する。